

Epiphanies

その瞬間

No.10

原虫病研究へ導いた 恩師の一言



応用免疫学研究室

松本 芳嗣 教授

Yoshitsugu Matsumoto

私の専門は、寄生虫(原虫)による感染症の研究です。ここ10年間で取り組んでいるのが、「顧みられない熱帯病(NTD)」。これは熱帯地域で蔓延する寄生虫や細菌が原因で発症する感染症で、私が20年前から研究している「リーシュマニア症」をはじめ、デング熱やトラコーマなど約30疾患群の総称です。貧困層の病気と思われがちですが、その層は世界人口の7割で、大半の人が発症するリスクがあります。まさにネグレクト、先進国の人々が顧みない病気です。過去5年間はバングラデシュ、現在はトルコで調査を続行し、NTDの抑制について研究しています。

寄生虫研究に携わるきっかけは偶然の産物でしょう。私は見聞を広めようと帯広畜産大学獣医学科を1年間休学して世界1周旅行に出ました。諸事情で南ベトナムに半年滞在。一旦帰国後、ケニア、タンザニア、ウガンダの国立公園の撮影取材を

NHKから依頼され、アフリカで3か月を過ごしました。日本に戻ると研究室配属の時期でしたが、敬遠されて行き場がない。そのときに「私の家畜生理学教室へ来なさい」と声をかけて下さったのが、東京大学農学部教授を併任され、のちに帯広畜産大学学長を務める原虫病研究の第一人者、鈴木直義先生でした。寄生虫の研究は、すべてこの一言からです。

大学院の修士課程に進んだ私は、卒業後は海外で働きたいと鈴木先生に相談すると「それなら博士号を取得しなさい」と勧められ、京都府立医科大学大学院医学研究科博士課程へ入学。ここで師事したのが、寄生虫学の権威である吉田幸雄先生です。与えられた課題は当時原虫と考えられていたニューモシスチス・カリニ肺炎でした。その後のエイズの流行で一躍注目される疾患になり、私は多くの国際学会でカリニ肺炎に関する研究発表の機会に恵まれます。博士論文はニューモシスチス・カリニの生活史に関する研究です。その後、マラリア研究の第一人者で、ケース・ウェスタン・リザーブ大学教授の相川正道先生から誘われて、同大学でマラリアワクチンの研究に携わりました。こうして尊敬する3人の恩師のもとで、与えられたテーマを一生懸命に研究し、成果を上げてまた新たな研究に取り組む。その連続が自分の専門分野を築いたのではないかと、研究者としてのキャリアを振り返ったとき、そう実感しています。



NTDの研究調査で訪れた
バングラデシュの農村での一コマ。